

# 目指せ！ 銚子をジオパークに！

## 「ジオパーク」活動⑤

### 大地からの教訓を活かす



▲ボランティア団体の「稲むらの火」防災教育プロジェクトが7月12日(休)、明神小学校で行った授業の様子

屏風ヶ浦をはじめとする銚子の景観は、長年の大地の活動によって生み出されたものです。しかし、美しく雄大な大地は、人々に感動を与える一方、ときに大きな災いをもたらします。

昨年、私たちは東日本大震災を経験しました。その経験を次の世代に語り継ぎ、これからも自然災害とともに生きていかなければなりません。

ジオパークの活動には、大地の成り立ちを知り、防災活動に役立てるといった側面もあります。

銚子には、「稲むらの火」の紙芝居を用い、小学5・6年生向けの防災教育を展開しているボランティア団体があります。

「稲むらの火」は、安政元年（1854）に発生した、安政南海地震での故事を元にした物語です。

舞台は紀伊国宍粟郡広村（現和歌山県宍粟郡広川町）。広村の庄屋であった浜口梧陵は、地震発生後、津波の来襲を予期し、村に迫る危険を知らせるため、高台にある自分の田に積み上げられた稲むら（稲の束）に火をつけました。火事だと思った村人は、消火のために高台に集まり、その結果、多くの人命が救われました。その後、梧陵は津波により家や仕事を失った村人に、私財を投じて生活の再建を図るとともに、防潮堤を建設しました。梧陵の村に対する支援は、災害に苦しむ村人に生きる希望を与えました。

浜口家は代々銚子を拠点にしようゆ醸造業を営んでおり、梧陵自身も銚子にたいへん縁の深い人物です。

「稲むらの火」の紙芝居を用いたボランティア活動では、海のまちに育つ子どもたちに、海の災害を教え、郷土愛を育む心が地域防災に必要であると伝えていきます。

まさにジオパークは、災害をも含めた、あらゆる大地の営みから学ぶ活動なのです。

## 今月の表紙



銚子がぐるっとお祭り広場に沿岸一帯でイベントが開催

7月15日(日)は、市内のさまざまな場所で開催されました。

早朝に勤労コミュニティセンター前では「JAちばみどり女性部朝市会夏のイベント」が開催。銚子マリーナ特設会場では、約3万人が来場した「第18回きんめだいまつり」。銚子海上保安部による犬吠埼灯台特別公開とあわせて開催された、地元ミュージシャンのライブイベント「出前！銚子音楽祭2012 in 犬吠埼灯台」。君ヶ浜しおさい公園では、11店舗が門外不出のまかない料理で味を競いあった「まかないグランプリ 第1回銚子・東庄・旭・神栖地区予選」。そして夜には、イオンモール銚子で「太鼓と花火のファンタジア」。夜空を彩った約2000発の花火が一日を締めくくりました。

朝から晩までイベントが連続し、沿岸一帯が多くの市民と観光客でにぎわい、銚子の熱い夏の始まりを告げる一日となりました。